



多くのサポーターが
つめかけました。



10月9日の
開会式です。

世界に羽ばたけ!! 電動車椅子サッカーワールドカップ開催

平

成19年10月9日から10月13
日まで日本において、第1

回電動車椅子サッカーワールドカ
ップ (FIPFA World Cup Japan
October 2007) が開催されま
した。参加国は、日本をはじめと
する、アメリカ、ベルギー、デン
マーク、イングランド、フランス、
ポルトガルの7か国。参加選手団
は、選手やコーチなどのチームス
タッフを含めると200名にのほ
り、電動車椅子サッカーとしては
初めての世界大会です。

今回はこの大会に参加した日本
代表選手を中心にレポートしま
す。

世界各国で取り組まれてきた 電動車椅子サッカー

電動車椅子サッカーは、重度の障害のある方も参加できる障害者スポーツでアメリカやカナダなどで「パワーサッカー」と呼ばれていたスポーツをヒントに、運動機能の制約があっても電動車椅子の操作ができれば参加できるスポーツとして1982年、大阪で始められました。その後、各地に広まり日本電動車椅子サッカー協会に30を超えるチームが登録され、競技に取り組んでいます。

電動車椅子サッカーは、各国で独自のルールにより取り組まれていましたが、フランスを本拠地に電動車椅子サッカーの国際統括団体であるFIPFA(国際電動車椅子サッカー連盟・Fédération Internationale de Powerchair Football Association 2006年7月設立)に

おいて、今回初めて電動車椅子サッカーワールドカップを開くにあたり、国際統一ルールが定められました。日本国内ルール

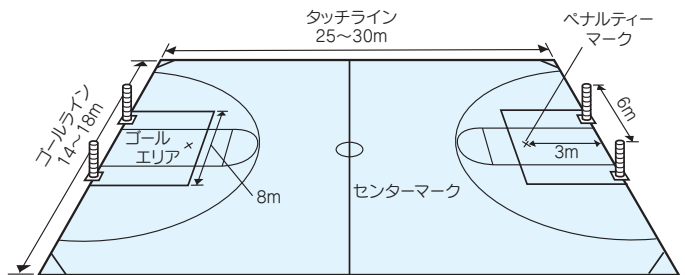


国際統一ルールでの使用競技球は現在、国内では販売されていませんが、今後国内で販売予定です。

と国際統一ルールとの違いは、競技球の大きさの違いと電動車椅子のスピード

の違いです。国際統一ルールでは、33センチとこれまで国内で使用われてきた競技球より一回り小さいものです。電動車椅子のスピードは時速10キロメートルとなっており、国内ルールでは時速6キロメートルが最高スピードだったので、かなりスピードアップしたものとなっています。さらに電動車椅子前部には、フットガードと呼ばれるものを取り付け、これをボールに当ててパスをしたりドリブルをします。国内の競技では、これまで軽自動車のタイヤを半分にしたパンパーと呼ばれるものを取り付けて行ってきました。国内大会では平成19年度までパンパーとフットガードが並存し、平成20年度からはフットガードに完全移行する予定です。

■今大会で使用されたコート

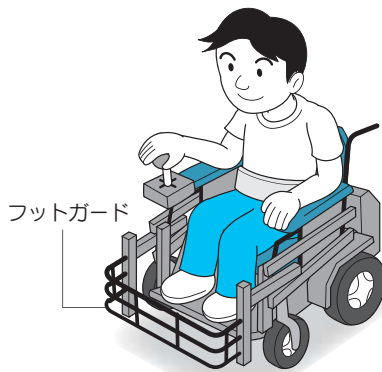


■これまでの国内ルール



バンパー

■国際統一ルール



フットガード

コートはバスケットボールと同じコートを使用し、前後半20分ずつ、1チーム4人(うちゴールキーパーが1名)で競技します。また、「ツーンワン」(30頁右下図)と呼ばれる、ファウルが設けられています。ボールをキープしている選手の半径3メートル以内に相手チームが2人で奪いに行こうとすると、ファウルとなり、その場所からボールをキープしていたチームにフリーキックが与えられます。

平成20年4月以降国内大会でも統一されるフットガード付きのもの。

平成20年3月まで国内大会において使用できるもの。

電動車椅子サッカーの歴史

1978年

フランスで重度身体障害の学生のために『Wheelchair Electric Football』が考案される。

1979年

カナダで独自の競技規則による『Power Soccer』が始まる。

1980年代初期

カナダからアメリカと日本に『Power Soccer』が伝わる。

1980-2005年

各国独自のやり方やルールで行われてきたが、『Powerchair Football』が世界規模で普及してきたことで、国際交流が活発に行われるようになる。

2005年10月

アメリカ、カナダ、イングランド、フランス、日本、ポルトガルに、ベルギー、デンマークを加えた8か国がコインブラに集まり、国際ルールのベースをつくる国際会議を開催。

2006年7月

アメリカ、カナダ、デンマーク、イングランド、フランス、日本、韓国、ポルトガル、トルコの9か国が参加して、国際競技規則、規約、組織、役員を決定するサミットをアトランタで開催。その場で正式にFIPFAが組織され、呼称も『Powerchair Football』と統一される。また6か国によるワールドカッププレ大会が開催される。

○ワールドカッププレ大会順位

1位：フランス 2位：日本 3位：イングランド
4位：アメリカ 5位：カナダ 6位：デンマーク

資料：「第1回FIPFAワールドカップ2007公式プログラム」より抜粋

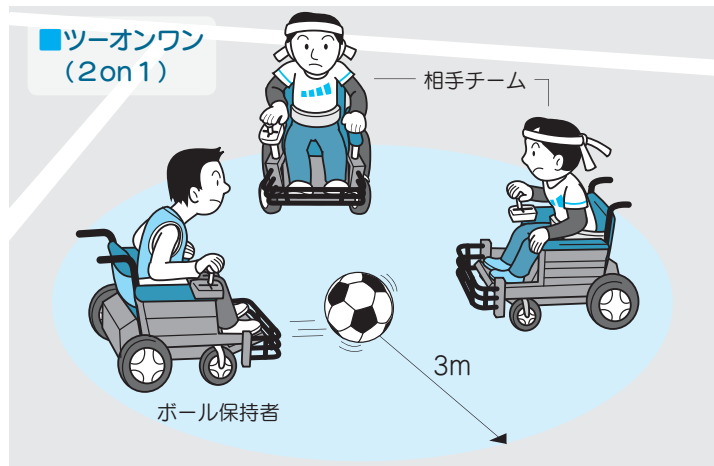
愛知、大阪での合宿により 日本代表選出へ

今回、日本代表が選抜されるまで、愛知県（4月実施）、大阪府（8月実施）で2回にわたり合宿が行われ、この中で日本代表選手8名が選出されました。日本代表の監督はピクトリーロード奈良の監督、重松弘昭さんです。「代表選手の選考は和を重視したチームづく

りをしていきたいと考え、チームプレーができる人選を行いました」と重松さんは説明します。

代表8名に選ばれた中の、高橋弘さんは、日本電動車椅子サッカー協会ワールドカッププロジェクト推進本部本部長も務め、選手兼協会役員としてFIPFAとの連絡調整を担ってきました。高橋さんは、東京都のFINEの選手兼監督として活躍しており、日ごろ

■ツォンワン (2on1)



ボールから3m以内に2人がかりで奪いにいくと、相手チームのファウルとなり、ボール保持者はこの場からフリーキックできます。

は南大沢養護学校の体育館で週末に練習をしています。高橋さんは、1994年、自動車事故に遭い、2年間の入院の後、96年退院。リハビリの中で電動車椅子サッカーと出会い、5名のメンバーでFINEを結成しました。FINEの登録メンバーは現在、9名で今年からは全員がフットガードを装着してプレーしています。高橋さんが使用する電動車椅子は、手元のジョイスティックにあるスイッチ

でモードが切り替えられるようになっており、国内大会は時速6キロメートル、ワールドカップでは時速10キロメートルにして、同じ電動車椅子でプレーしています。FINE創設来、高橋さんと一緒にプレーしてきた関谷幸治さんは「やはりチームスポーツなので、練習にすれば仲間にあうことができるのがこのスポーツの魅力ですね。ワールドカップも開かれるようになって、もつと広がっていくといいですね。日本代表には頑張ってもらいたい」と話します。他の代表選手もそれぞれ所属するチームでプレーしながら、9月にワールドカップ開催会場となった東京スポーツ文化館(Bunkyo)で行われた合宿に参加し、チームづくりを行って、今大会に臨みました。

携帯電話により大会を生中継

今大会は、さまざまな方や団体が運営に関わりましたが、特定非営利活動法人STANDは、携帯電話で全試合をインターネット中継するという独特の手法でサポートしました。携帯電話で中継することから「モバイル」と「中継」をとって「モバチュウ」という造語をつくり、PRしました。石川県に事務局があるSTANDは、2003年

の国内での電動車椅子サッカー大会からこの「モバチュウ」に取り組んでいきます。この活動に取り組みきっかけとなったのは、電動車椅子サッカーのメンバーであった方が、体調等の関係で大会に参加できないということがあり、せめて会場の様子だけでも見せてあげたいと携帯の動画で中継をしたことから始まったのだそうです。

そのときは、携帯から携帯への中継でしたが、より多くの人にみてもらいたいと金沢にある事務局に携帯から動画と音声を電話回線で送信、インターネットに流せる動画ファイルに事務局で交換して、ホームページ上からライブ中継を行うサービスに進化させています。

このほかにも、個人でボランティアに参加した方もいますが、ボランティア募集と統括を担当した飯屋美樹さんもその一人です。2002年日本、韓国で行われたワールドカップサッカーのボランティア仲間から電動車椅子サッカーのことを紹介され、その年の国内大会からボランティアとして協力していま

DATA

特定非営利活動法人 STAND

〒920-8202
石川県金沢市西都1-5-54
TEL. 076-267-0099
FAX. 076-267-5544
<http://www.i-project.jp/stand/>

す。平日はボランティアが集まらず、苦勞したようですが、各国選手に今大会でいろいろと喜んでもらったことが励みになったとのことです。

予選通過するも フランスに惜敗

予選は参加7か国総当りのリーグ戦で行われ、勝利チームに勝ち点3、引き分けで両チームに勝ち点1が与えられ、負けると勝ち点なしという形で行われました。日本、初戦の相手はベルギー。プレ世界大会で優勝しているフランスの支援のもと、ベルギーは電動車椅子サッカーに取り組んでいます。日本は3対0で快勝しました。歴史に残る1点目をあげたのは、北沢洋平さんです。北沢さんは、小学校5年のころから電動車椅子サッカーを始め、東京都で活動しているレインボー・ソルジャーに所属しています。試合後、北沢さんは「最初から点をとることを狙っていません。チームに貢献できてよかった」と語りまし



日本代表(レインボー・ソルジャー所属)北沢 洋平さん

電動車椅子サッカー日本代表

監督

重松 弘昭さん (ビクトリーロード奈良監督/奈良県)

コーチ

高橋 弘さん (FINE監督兼プレーヤー/東京都)

浅岡 俊彰さん (Wings監督/岐阜県)

近藤 公範さん (Red Eagles兵庫監督/兵庫県)

アドバイザー

岡田 武史さん (98年ワールドカップサッカー日本代表監督)

選手

高橋 弘さん (FINE監督兼プレーヤー/東京都)

※コーチ兼任

野田 拓郎さん (Yokohama Crackers/神奈川県)

※キャプテン

北沢 洋平さん (レインボー・ソルジャー/東京都)

中坪 勇祐さん (レインボー・ソルジャー/東京都)

重松 弘樹さん (ビクトリーロード奈良/奈良県)

林 隆一さん (ビクトリーロード奈良/奈良県)

田中 雅人さん (ビクトリーロード奈良/奈良県)

吉沢 祐輔さん (レインボー・ソルジャー/東京都)

た。高橋さんも途中出場し、コーナーからのキックインを中坪勇祐さんが合わせてシュートし、アシストでチームに貢献しました。中坪さんも、北沢さんと同じレインボー・ソルジャーで活躍しています。目指していた代表に選ばれ、正直うれしいと語る中坪さんは、バンパーに当てるコースを狙うシュートが得意で、初戦で力を発揮してくれました。中坪さんは8年ぐらい前、友だちから紹介され、電動車椅子サッカーに取り組むようになりました。「今までのバンパーからフットガ

っています」と中坪さんは日ごろの心がけを話してくれました。その後、予選リーグで日本代表は、優勝候補のフランス、アメリカに負けたものの、4勝2敗で決勝進出しました。決勝初戦は、前日予選で5対0で負けたフランスです。予選のフランス戦では出場しなかった北沢さんなどをスタメンで起用し、フランスの攻撃の前に、後半はうまく対応し0対0でほぼ互角の戦いだったものの、延長後半1失点。前日は失点後、一気に崩される面がありました

ードに代わり、競技球も小さくなつてパスやシュートが速くなりました。より競技性が高まったと思います。チームプレーのため、連携が重要です。あまり自分から話かけるほうではなかったのですが、電動車椅子サッカーをやりはじめてから、できる範囲でコミュニケーションをと

が、決勝ということもあって全選手一丸となって奮闘し、果敢に攻め込んだものの守りきられて惜敗にいたしました。

その後、3位決定戦では初戦で戦ったベルギーとの対戦となりました。前半にベルギーに1点入れられるも、後半に追いつき1対1。延長戦でも決まらずPK戦となりましたが、5対4でベルギーの勝利。日本は残念ながら4位に終わりました。

4位という結果を
今後に活かす

ベルギー戦後、中坪さんは、「悔しいというのが一番、この結果は受け止めて、これから活かしていきたい。ただ今回、負けて悔しいというだけでなく、いろんな国のサッカーが見れて強いなどというのが感じとれてよかった面もあります。最後までサポーターが応援してくれて力になりました」と話してく

れました。監督の重松さん

は「選手はよくやってくれた。今回の試合を通じて、世界レベルで



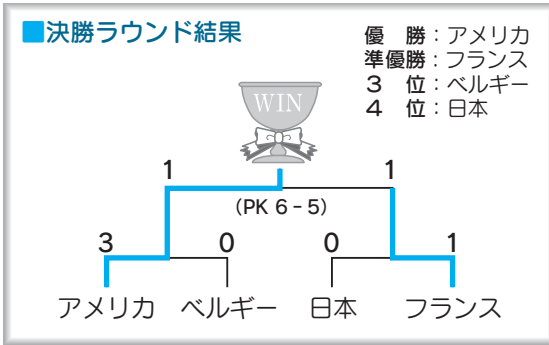
日本代表監督
重松 弘昭さん

■予選ラウンド結果

	アメリカ	ベルギー	デマーク	イングランド	フランス	日本	ポルトガル
アメリカ		4-0	6-0	3-0	1-1	2-0	8-0
ベルギー	0-4		4-0	1-1	0-3	0-3	11-0
デマーク	0-6	0-4		1-1	0-9	0-4	3-0
イングランド	0-3	1-1	1-1		1-1	0-4	7-0
フランス	1-1	3-0	9-0	1-1		5-0	10-0
日本	0-2	3-0	4-0	4-0	0-5		7-0
ポルトガル	0-8	0-11	0-3	0-7	0-10	0-7	
結果	5勝1分0敗	2勝1分3敗	1勝1分4敗	1勝3分2敗	4勝2分0敗	4勝2敗	0勝6敗

戦うには電動椅子自体のレベルアップや代表チームとしての日ごろの連携・コミュニケーションが欠かせないと感じた。ただ、一部の選手は今大会で日に日に進歩したり、他国のプレーを吸収して自分でやってみる選手もいた。最後まであきらめない大和魂は見せられたのではないかと思っている」と語ってくれました。今大会には、98年にフランスで行われたワールドカップの日本代表監督だった

■決勝ラウンド結果



競技人口を増やし、パラリンピック競技種目に

岡田武史さんも、アドバイザーとして参加し、静岡で行われた合宿などにも駆けつけ、協力してきました。「最初は、勝たなくてもいいと思っていましたが、選手達が必死にプレーしている姿を見るとだんだん勝って欲しいという気持ちになってきた。今大会では気持ちを出すところが課題だと思っていたが、出してくれたと思う」と岡田さんは語ります。

今大会、選手として協会役員としてさまざまに活躍してきた高橋さんは「まだまだ、電動椅子サッカーは知られていない面があります。電動車椅子利用者でも知らない方もいらっしゃると思います。私はラケットなどを持つことはできませんが、ジョイスティックなら操作できます。重度の身体障害のある方も参加できる可能性があるスポーツです。今大会を通じて競技人口を増やしていきたい。私がやりはじめたころはワールドカップなんて夢のまた夢でした。この次はパラリンピックの競技種目ともなるように、この競技を広めていきたい」とのことです。

今回は、あと一歩というところで4位に終わりましたが、高橋さんをはじめ、各選手はもうすでに次の大会に向け競技生活を送っています。次回、ワールドカップでは、メダルを獲得してくれることでしょう。

DATA

日本電動車椅子サッカー協会

広報担当：高橋 弘
E-mail : takahashi@jewfa.jp
FAX. 020-4665-9201
(24時間受付・D-FAX)
http://www.web-jpfa.jp/



日本代表選手(コーチ兼任) 高橋 弘さん



アドバイザー 岡田 武史さん

※この記事は、平成19年11月までの情報をもとに作成しました。